

宣伝+最近の 60 代男性について

入局して 4 カ月がたち、「最近ようやく学生が話していることが分からないということが無くなってきたなあ・・・」と思っていたらいつのまにか学生は夏休みに突入しており、学生が言うことが分かるようになったのではなく学生がいなかったことによりようやく最近気が付いた今日この頃。シン・医局長の許可を得たのでこの場をお借りして私の一番の本業趣味の宣伝をさせて頂きたい。

来る 9 月 24 日(日)、福島医大管弦楽団の OB・OG で構成される「アンサンブル光が丘」の第 12 回定期演奏会にソリストとして出演することになった。こちらに来て早々にこのような機会を頂けたことは非常に光栄であり、またソリストとして一つの演奏会で 2 曲を演奏するのも初めてのことなので、あと 2 カ月弱精一杯練習しないとイケない。本文の最後にチラシを掲載することの許可を寛大なシン・医局長から得たので興味がある方や予定が空いている方はぜひ下記を参照されたし。というか来て下さい、お願いします。

さて、「医局日誌に投稿する際は必ず例の 60 代男性についての情報や動向を載せること」という不文律があるようなので、今回も御多分に漏れず投稿させていただくこととする。実は先日少人数の飲み会の前後に例の 60 代男性がちょっとした奇行(?)に出ていたことが意外にも知られていないようで、周知のためにここで述べさせていただくこととする。

それは 7 月も終わりに差し掛かったある日のこと、7 月の研修医の送別会(H 先生、S 藤先生お疲れ様でした)をとある福島市内の焼肉屋で 19 時から開催する予定となっていた。自分がその幹事だったために開始 30 分前に S 浦先生から電話が入り、なんでも例の 60 代男性に無茶ぶりをされたので飲み会の開始に間に合わないというご連絡。たぶんこれはいつものことだと思われるのでとくには触れない。19 時すぎになりぼちぼち人が集まったころ、幹事をしている自分ではなく隣にいた A 部先生の携帯に例の 60 代男性から電話が入る。1.2 分会話した後電話終了し、まだ教授室にいるので遅れるということ。これもいつものことなので触れない。ところが、その後 A 部先生が「教授がオマエに 3 回も電話を掛けたのに出なかったって怒っていたぞ。」と言うのだ。おや?と思い自らの携帯を見るが、当然着信は入っていない。普通なら教授からの電話を連続ですっぽかしたとなると一大事だが「あの人」に限って何故そう言う焦りが芽生えないのか、という問題はさておき、その場では「どうせ番号を見間違えて知らない人にでもかけたのだろう」ぐらいにしか思わず、結局教授不在のまま飲み会がスタートした。30 分も経ったかという頃教授が現れ、なにやらやかましてしまったようなことを仕切りに仰っていたので、「そういえばこっちには着信来てなかったですけど、電話番号をお間違えではなかったですか?」と伺ってみたところ、その返答が会場にいた全員の予想の斜め上を行っていた。なんと教授は自らの電話帳を開き、私の苗字を検索かけて、ヒットした 1 件の番号に電話をかけたのだ。察しのいい方ならこの時点で気が付くかもしれないが、残念ながら私はまだ教授とプライベートで仲良く電話する仲までは行っていない。つまり、教授の電話帳の中に私がいる筈はないのだ。では、同

じ苗字の人が誰だったかという、私の実の父親(学会などで教授と面識あり)だった。残念ながら教授の3回のラブコールにはすぐに出られなかった父親だが、ご丁寧に数分後に折り返したようだ。この時点ではまだ着信欄に「T村先生」と表示されていたので、残念ながらこの時点でもまだ教授は過ちに気が付かず、さらに電話先で聞くと声が似ているからかどうかは不明だが通話相手を私だと思い込み電話を継続していた。しかし電話の向こうから「先生、電話先を倅と間違えていませんか？」という一言がでると、さすがに1を聞いて10を知るお方であらせられるので、ようやく状況を理解することができたらしい。かくして、無事に飲み会に合流することができたという、なんとも教授らしいほっこりしたエピソードでした。

しかし、この話には後日追加された逸話があったのでそちらも追加しておく。幹事の私が電話に出ない(と思っていた)教授はなぜか、家庭を持っていらっしゃって普段はなかなか飲み会に参加されないはずのY田先生のご自宅に電話をかけたそう。しかも運の悪いことに電話にでたのはY田先生ではなく小学生になられるご子息であり、またしても通話相手が目的の人ではなくその家族だったことに気が付かずに飲み会に遅刻するだけの場所が分からないだのお話になられていた教授は、パパの帰りを待っていたら急に変なおじさんが電話で訳のわからないことをまくしたててきた状況を理解できなかったご子息に「ギャー！」と言われてしまったとのことであった。患者を診ただけで疾患や検査のことまで正確にアセスメントでき、ことに電気生理に関しては一瞬検査結果を提示しただけですべてをご理解される御方であるのに、このような状況においてなぜに正確な状況把握がなされないのかという問いは、改めて人間の脳の複雑で難解な一面を示しており、神経内科の醍醐味と言えるだろう。

アンサンブル光が丘

第12回演奏会

チェロ 時村 瞭
指揮 佐藤 崇志

プログラム

- E.エルガー：セレナード ホ短調 Op.20
G.フォーレ：エレジー ハ短調 Op.24
P.チャイコフスキー：ロココ風の主題による変奏曲 Op.33
J.ラインベルガー：九重奏曲 変ホ長調 Op.139 (室内管弦楽版)

2017年9月24日(日)

13時30分開場 14時開演

福島テルサ FT ホール

入場無料・全席自由

アンサンブル光が丘は、福島医大管弦楽団のOB、OGによって結成された室内オーケストラです。2005年に最初の演奏会を開催し、室内楽から徐々に編成を拡大しながら演奏会を重ねてきました。

今回は、鹿児島県出身の神経内科医で気鋭のチェリストである時村瞭氏をお招きしての、フォーレとチャイコフスキーの協奏的作品2曲を含め、全てロマン派後期の作品を演奏することとなりました。これまでモーツァルトなど古典派作品を主に取り上げてきた当団としては大きなチャレンジではありますが、お楽しみいただければ幸いです。

お問合せ 090-3644-1080 takasiev@d7.dion.ne.jp (佐藤)